

五月のテーマ

実践こそ倫理



え・城谷俊也

気づきを得たら 動いてみる

倫

理運動の創始者・丸山敏雄が記した『実験倫理学体系』に、次のような一節があります。

「倫理者」とは、倫理研究者、並びにその実践者をいう。しかし、研究者と実践者とはつきり区別されているというわけではなく、新研究者が同時にその実践者でもあり、実践によって新しい研究もまた進められて行くというもので、二者を切りはなすことは出来ない。」

簡潔に言う、「倫理の研究は、実践の積み重ねで得られる証拠をもって行なわれる」となるでしょう。これは倫理に限らず、様々な場面においても同様だといえます。しかし現代は、知識の習得による納得がなければ、実行しないという傾向が強い世の中です。この「知識の習得」を「研究」に置き換えると、「研究して、納得しなければ、実践はできない」ということとなります。現代人の多くは、この行動パターンで動いているのではないのでしょうか。

高校卒業後、東京の企業に就職

*

したK氏は、数年後に印刷業を営む父親の跡を継ぐ決意をします。計画的に動く会社組織での経験を活かし、事業を拡大したいとの思

いを秘めてのUターンでした。ところが、入社初日に父親から出された指示は、机の上に置かれた500枚の名刺を指して「どこでもいいから訪問して、これを配り終えるまでは他の仕事はしなくてよい」というものでした。

父親は高度経済成長長期に靴底を減らして売上を伸ばしてきた、言わば、「まずは動いてみる」タイプの人間です。むやみに営業しても無駄になると考えていたK氏にとっては納得のいかない指示でした。後に、この考え方の違いが事あるごとに意見の対立を生み、次第に親子の確執が深まります。K氏は「いずれ自分の代になれば」と考えるようになっていきます。

数年後、父親は大病の末に他界します。跡を継いだK氏は、「いよいよ自分のやり方で経営する時が来た」と、行動よりも思考することに重点を置き、企画の発案や計

画作りに時間を費やします。しかし、頭の中だけで描いた企画や計画は、現場や社会とのずれが大きくなり、何一つ結果が出ません。

業績は下降線をたどり、最終的には廃業という結末に至ります。「父親とは反対の路線で父親を越えようとしたものの、足元にも及ばなかった」と、今は別の業界に進んだK氏は振り返ります。

純粋倫理の基本テキスト『万人幸福の栞』には「気づくと同時に行なうことが成功の秘訣、健康の秘法」とあり、それを十七カ条の中の第一条に配しています。これは、第二条以降の文章に様々な気づき（＝学び）を得たととしても、行動に移さなければ変化は起きない、まずは、気づいたらすぐ行なう習慣を身に着けることが肝要であるとの意図を含みます。

考えることに重きを置き過ぎると、動けなくなるのが人間です。「実践によって新しい研究もまた進められて行く」という、冒頭に引用した文章を肝に銘じて、様々な場面に臨みたいものです。